

阪急電鉄株式会社×立命館大学映像学部 初の連携企画
「ゆめ・まち・みらい」アート&コミュニケーションコンテスト
—8月21日（金）より梅田ツインビジョンで期間限定放映—

阪急電鉄株式会社（大阪市北区、代表取締役社長：中川喜博、以下：阪急）と立命館大学映像学部（京都市北区、映像学部長：品田 隆、以下：映像学部）は産学連携の取り組みとして、阪急梅田駅の大型デジタルサイネージ「梅田ツインビジョン（300インチ×2基）」において8月21日（金）より映像学部の学生が企画・制作したオリジナルの短編映像作品を放映します。

放映する映像はコンテスト形式で映像学部生から作品を募集し、応募作品21本（参加者数：約100名）から学内選考を経て阪急を加えた最終選考の結果、選ばれたものです。

○ 放映作品概要

放映作品数：全7作品

放映期間：2015年8月21日（金）～2015年9月6日（日）

放映場所：阪急梅田駅1階中央コンコース

阪急デジタルサイネージ「梅田ツインビジョン」

* 放映作品については、8月20日（木）より立命館大学HPでも公開します。

<http://www.ritsumei.ac.jp/cias/>

○ 放映作品

（グランプリ）

氏 名：飯田 雄平（いいだ・ゆうへい）

回 生：1年生

作品タイトル：「ゆめをのせ、まちへ、みらいへ」

作 品 内 容：京都、大阪の街並みとそこに暮らすひとたちの夢を紙ヒコーキにのせ、それぞれの未来にむかって飛ばしていく。



(準グランプリ)

氏 名：川崎 春香 (かわさき・はるか)

回 生：1回生

作品タイトル：「あなたの手」

作 品 内 容：一人ひとりの手で街がより良くなっていくことを表現している。

「みんなでつくる」をテーマに掲げ、一人ひとりの力はちっぽけだが、大勢の力が合わされば街はより良く変わる。良い街は良い夢を育み、良い未来につながっていく。折り紙で作り、ぬくもりのある画面に仕上げた。また、折り紙の後ろに衝撃吸収材を貼り、遠近感を出した。

(佳作)

氏 名：萩 颯太郎 (おぎ・そうたろう)

回 生：3回生

作品タイトル：「ツナガル」

作 品 内 容：ある日の朝から夜までの風景を切り取ったそれぞれのカットを阪急電車でつなぎあわせている。阪急電鉄がこれらの街に住む人々のゆめを運び、未来につないでいっていることを表現している。

(佳作)

氏 名：西村 浩司 (にしむら・こうじ)

回 生：2回生

作品タイトル：「Calm film」

作 品 内 容：「電車に乗って楽しむことは何か」について考え、表現した。本を読む、景色を見る、音楽を聴く、駅弁を食べる人…電車での楽しみ方は人それぞれで、楽しいと思うとき、人は笑顔になる。一枚一枚紙に手書きのアニメーションを作り、in と out のフェードアウト以外にエフェクトを使わない、アナログ感を重視した。

氏 名：三宅 伸広 (みやけ・のぶひろ)

回 生：3回生

作品タイトル：「つながる」

作 品 内 容：京都、大阪、兵庫の三府県にある鉄橋が同じアングルになるようになるように撮影し、それぞれの府県が「つながっている」ことを強調した。それぞれの府県のフォントと色もこだわっているのがポイントです。最後の「つながる」と、コラボ文字の縁取りは阪急電鉄の車体カラーにした。

氏 名：飯野 大介 (いいの・だいすけ)

回 生：2回生

作品タイトル：「人で繋がるゆめ・まち・みらい」

作 品 内 容：町中で歩く人に声をかけ、夢を書いてもらうスライドショー。

ホワイトボードに「夢」を書いてもらうことで、希望や期待を表現し、その人々の笑顔は、輝かしい「みらい」を思わせる。そして、幅広い老若男女が登場することで、人と人がつなぐ「まち」を表現している。

氏 名： 山田 佳樹（やまだ・よしき）

回 生：3回生

作品タイトル：カラフル

作 品 内 容：15秒でゆめ・まち・みらいのキーワードを敷衍（ふえん）した。音のない映像であるからこそ、駅構内で目を引くことを狙い、シンプルに、カラフルなテイストを盛り込んだ。

○ 阪急電鉄株式会社 都市交通事業本部 都市交通計画部からのコメント （産学連携企画について）

鉄道会社にとって、大学は学生さんや教職員の方々がお客様であるだけでなく、沿線の魅力を高める上での貴重な沿線資源でもあります。大学や学生諸君がアクティブであることは、沿線にも大きな活力を与えるものと考えます。この活力こそが未来にわたって夢や笑顔が溢れる沿線の源であるにとらえ、募集内容として「ゆめ・まち・みらい」「笑顔」を設定しました。

なお、産学連携には様々なパターンがありますが、今回は立命館の「映像」制作力と阪急の「梅田駅」というロケーションを生かした連携について両者の思いが一致し今回の企画に至ったものです。

（学生作品全体について）

はじめの試みながら若い感性を生かした映像作品に一定の期待感がありましたが、かなりの数の作品がその期待を上回っていました。どこから撮ったのかと思うようなシーンもあれば、自社の宣伝物にも使いたいと思わせるようなアイデアもありました。一方でナレーションやBGMなどの音声が使えないという制約上、キャプションをより効果的に活用したり、ワンカット、ワンフレーズ加えるとさらによくなっただろうにという惜しい部分も見受けられました。

今回は制作者側からの映像発信でしたが、これが実務であればクライアント様との相互のコミュニケーションによってさらに磨きがかかったと思います。

（グランプリ受賞者について）

夢を紙に描き、紙ヒコーキにして青空へ放つ。グランプリ作品である飯田雄平さんの「ゆめをのせ、まちへ、みらいへ」は、一人ひとりが心の中に持つ夢を、映像に投影することにより共感を得ることができる作品に仕上がっています。

徐々に明らむ空と、夢を運ぶヒコーキが交差する青空が、特に印象的でした。

○ 立命館大学映像学部長・品田隆からのコメント

(コンテスト全体について)

今回のコンテストは、映像だけの表現（無音）であるため「映像で語る」ことができるかどうか重要なポイントとなりました。

グランプリを受賞した作品は、紙ヒコーキをモチーフに世代の異なる人々がそれぞれの夢をまちへ、未来へ紙ヒコーキに託して飛ばす内容です。ここでは制作者の思いが様々な世代に分かりやすいメッセージとして表現されています。

3、4回生は、1、2回生と比べると撮影・編集技術という面での経験は豊富であり、着実に学部で学んだ技術、スキルが習得されていると感じる一方で、1、2回生は自由な発想、オリジナリティ溢れるアイデアが多数あり、企画力、発想力の重要性を再認識できる機会になったと思います。

それぞれがプロデュースした作品が社会的に評価を受け、公共の場で発信できる機会があるということは、「映像」を専門に将来キャリアを積んでいこうと考えている学生たちにとって、非常に重要なことです。改めて、このような学びの場を提供いただいた阪急電鉄には感謝をしております。

○ グランプリ受賞者 映像学部1回生・飯田雄平からのコメント

多くの人たちが暮らす「まち」には、たくさんの「ゆめ」があり、それぞれの「未来」があります。雑踏の中で一生懸命暮らす人々の姿から、明るい未来を生み出していくという思いをこめました。

多くの方が利用する梅田駅に放映されるということから、演技をしている表情ではなく、自然な笑顔が溢れる明るい作品にしたいという思いが強くなりました。今回の受賞を励みに、人の心に残る映像を今後も創っていきたいと思います。

○ 立命館大学映像学部・映像学会学生委員 学会長・小川貴史からのコメント

映像学会学生委員会は、今回の企画に協力し、コンテストの募集と審査に関わる機会を得ました。

審査の際に重視したことは、「オリジナリティ→メッセージ性→クオリティ」という順番で評価をしたこと。これは、本企画の趣旨を踏まえ、クオリティは経験と学びの積み重ねによって上回生になれば誰もが習得していくスキルです。オリジナリティやメッセージ性に込められる企画力や構想力こそ、回生に関係なく映像を制作するうえで困難なことだと感じています。これらの点から、広く社会に発信できる映像として選定しました。

今回、1回生からのエントリーが非常に多く、4ヶ月間だけの学びでは撮影・編集技術に課題を感じる作品もありましたが、オリジナリティ溢れるアイデアはわたしたち上回生も改めて刺激を受けました。

今後、秋に開催する「映像アクション×キャリアフェア」で発表を行い、阪急以外の企業や他の学生からの評価を受ける場を設ける予定です。また、回生に関係なく正課以外でも学生同士で学びあえる場、仕組みを学会としても創っていきたいと思います。

阪急電鉄株式会社と立命館大学映像学部連携プロジェクトについて

1. 経緯・背景

阪急では、梅田ツインビジョンは商業用の広告媒体とされていますが、駅利用者の方々に普段とは違う商業広告以外の映像作品をご覧いただき日常生活の一瞬を心豊かにできる機会があればという思いから映像イベントを検討されていました。その連携先として本学映像学部にお声掛けがあったものです。

映像学部は日本で唯一の「映像」を冠にもち、学生の映画、CG制作等に実績を積んできたことから、今回の提案に賛同し連携して取り組むこととなりました。

本学部としても、学生自身がプロデュースした作品を通して、映像コンテンツの可能性を開拓し、映像が広く社会にどのような影響を与えるのかを体感できるということは、正課の学びの実践という点から、教学的に大きな意義をもつと考えています。

以上のことから、阪急の思いと実践的な教育の場を創造したい映像学部の思いが合致し、短編映像作品コンテストとしては初の産学連携の取り組みが実現しました。

2. 連携の意義・ねらい

立命館大学映像学部は、日本で初めて映像に軸をおいた総合大学芸術系学部として2007年に開設しました。映像はコミュニケーション・ツールであると同時に人の精神、生活に豊かさを伝え、時として社会を動かし、国際交流を促進します。その国の文化力の指標でもあり、今後更なる発展が見込まれる重要な文化産業でもあります。世界規模で急速にかつ、多様に発展する映像技術に対し、新しい文化の創造と発信、マネジメントできる力を養い、グローバルに活躍することを目指しています。

(連携の意義)

広く社会に向けた映像制作の実践と発表の場

- ・ 映像学部ではアート、ビジネス、テクノロジーの3分野に共通する造形力やデザイン力、シナリオやナラティブなどの基礎教育の強化を目的とした科目を設計し配置しています。
- ・ 今回の連携企画では、1、2回生からも積極的にエントリーを募りました。これは学生の入学時の映像制作に対する関心を、正課での学びと往還しつつ作品に結実させる場とするねらいをもっています。
- ・ 「梅田ツインビジョン」の周辺は1日40万人を超える通行者があるとのこと、大学での学びが、映像コンテンツの可能性を開拓し、映像を通じて広く人類と社会に貢献していくことを体感できる実践的な場であると考えています。

(阪急側の狙い)

- ・ 前述の通り、梅田ツインビジョンの活性化策として学生参加型の映像コンテストを検討していましたが、立命館大学に映像学部（国内の大学で「映像学部」を構えるのは唯一）があることを知り、作品のクオリティに対する一定の期待感から本企画を持ちかけたものです。

- ・ 立命館は、昨年の西山天王山駅近辺への中高移転や今春の大阪いばらきキャンパス開設などを通じて、学校法人としての立命館、あるいはその学生諸君が阪急沿線における存在感を高めており、創作活動を通じて沿線への理解や愛着がさらに深まればという思いもありました。
- ・ また、今回は作品制作・発表の経験の少ない1、2回生にも積極的なチャレンジを促すとの趣旨で進められており、阪急阪神ホールディングスグループが取り組んでいる社会貢献活動「阪急阪神 未来のゆめ・まちプロジェクト」の一環である「人づくり」のテーマにも合致するものと考えています。

3. 「ゆめ・まち・みらい」アート&コミュニケーションコンテストについて

(主な概要)

1) 映像作品の発表の場 (1、2回生にもチャンス)

- ・ 応募資格は学部生全体を対象としていますが、映像学部の基礎教育段階における学生の映像制作に関わるレベルを勘案しつつ、今回は特に映像を学び始めた1、2回生にも取り組みやすいように、あえて画角を16:9に限定して作品を募りました。彼らにとっては、コンテスト応募や作品披露の機会が限られていることから、自分のプロデュースした作品を社会に発信できるチャレンジの場を提供することで、今後の学びの動機づけを図る機会としています。
- ・ また、撮影機材は学部保有の貸出機材を基本としつつ、スマートフォン、タブレット、デジタルカメラなど個人所有の機材の使用も認めることで、より簡易に作品制作に取り組みやすくしています。

2) 映像表現のみの作品制作

- ・ 今回の作品発表の場となる梅田ツインビジョンはその仕様上、音声対応がなく、ナレーションやBGMといった音を用いた表現や効果は使えません。このため、シンプルに映像だけでの表現力で勝負することになります。1、2回生にとっては映像制作だけに集中できる反面、より企画力や発想力が試されることとなります。

3) コンテストの実施を通じた映像学部の教学的立場

- ・ 阪急より提供される発表の場 (大型デジタルサイネージ「梅田ツインビジョン」) で放映する作品については、学内選考の後、阪急も加えた最終選考によって選出。
- ・ この企画については、映像学部の3、4回生 (学会学生委員) が告知と学内選考に主体的に関わり、「立命館大学映像学部」として、メッセージ性、オリジナリティ、クオリティについて社会に発信できる作品かどうかという視点から選抜しています。その上で、阪急からも講評を受けることは、社会的な評価を学生自身が直接受け止める機会ともなり、大学の中だけでは学び得ることができない貴重な機会となります。
- ・ 投票にあたっては、応募学生同士も他者の作品について評価しあい、それぞれの学びにつながるようにしています。

4) 社会的評価・発信の場

- ・ 映像学部ではゼミの研究発表、個々の制作活動、体験型（インタラクティブ）作品の発表、ポスター展示など学生自身がプロデュースした成果物が集結するイベント「EIZO ジャンクション」と将来について考えるキャリア企画を融合させた「ジャン×キャリ」を毎年秋に開催しています。
- ・ 多数の企業が参加し、学生の作品について講評いただく場としています。今年は、このコンテストの審査プロセスを含め、応募した全作品の上映の発表を企画しており、映像産業を担う企業の方の評価を受ける機会としています。

（「ゆめ・まち・みらい」アート&コミュニケーション コンテストについて）

名 称：「ゆめ・まち・みらい」アート&コミュニケーション コンテスト

共 催：阪急電鉄株式会社、立命館大学映像学部

協 力：立命館映像学会学生委員会

応募資格：立命館大学映像学部生・研究科院生

募集内容：テーマ型「ゆめ・まち・みらい」部門、モチーフ型「笑顔」部門

審査体制：①映像学部生による投票（自由参加）で、上位作品を選出。

※審査は、映像学会学生委員会が中心となり、映像学部教員等が監督、助言的立場で審査に関わる。

②①で選出された作品を阪急と共同で最終選考を行い、上映作品を決定。

審査基準：メッセージ性、オリジナリティ、クオリティの3軸を基本とする。

4. 今後の連携について

長期的な連携を目的として、学生の自主的な取り組みだけにとどまらず、社会ネットワーク型授業の構築に向けて取り組むこととしています。

具体的には、2015年度後期より、正課授業「企画シナリオ実習（2回生以上配当）」において、阪急からゲストスピーカーとして招聘し、講義を行っていただく予定です。

また、映像学部は開講以来、企業や学外機関と連携して具体的な目標、目的をもったコンテンツの共同開発、共同研究を実施する科目「企業連携プログラム」を設置しています。ここでは、学外講師を招いた連続講義や個別の開発技術に関するゼミナール形式の指導、プロジェクト化された研究開発テーマをグループワークにより進めていくような授業連携を基本としています。受講生は現実的なコンテンツ開発の現場を授業の中で体験し、実践的な知識と技術を習得することができます。

今回の連携についても長期的には、企業連携プログラムの一環として取り組んでいけるよう積み重ねていきたいと考えています。

* 2015年度連携先企業

KYOTOCMEX 実行委員会、松竹グループ、立響60周年記念事業PJ、京都国際マンガ・アニメフェア2015、キヤノングループ、イメージスタジオ109、クレッセント

5. 立命館大学映像学部について

学部長：品田 隆

所在地：〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

設置年：2007 年

学生数：703 名（学部生）10 名（大学院）

教職員数：35 名（教員 25 名、職員 10 名）

正規留学生：29 名（中国 11 名、韓国 16 名、マレーシア 1 名、台湾 1 名）

* 学生数、教職員数、正規留学生数はすべて 2015 年 5 月 1 日現在の人数です。